

lui と y との対立

新田直穂彦
(東北大学大学院)

フランス語に於いて、間接目的(\grave{a} +N)が代名詞化されると、与格代名詞(lui)、中性代名詞(y)、 \grave{a} +人称代名詞の強勢形(\grave{a} lui)のいずれかに置き換わる。これらの代名詞の内、lui, y の両者に対して共起可能な動詞 ressembler, répondre, appartenir, donner, ajouter を取りあげて、lui, y の選択基準を考察した。

ressembler の構文では特定の個体が lui に、範疇が y に対応する。répondre の構文では自ら行動できるものが lui に、自ら行動できないものが y に対応する。appartenir の構文では、主語と間接目的との関係が lui, y の選択を決定する。donner, ajouter の構文では、間接目的が直接目的の受け手とみなされる場合に、lui が使用される。このように lui, y の選択基準は構文ごとに異なる。しかし、どの構文に於いても、間接目的を明確に指示する場合に lui が、曖昧に指示する場合に y が選択されるということは共通している。

明確な指示か、曖昧な指示かという区別は、lui, y の選択だけでなく、人称代名詞(il)と指示代名詞(ce)との選択にも認められる。このことから、lui と y との対立は、il と ce との対立と平行関係にあると考えられる。